農業という仕事は
自分にとても合っていたと感じています。

農業に懸ける情熱

1 就農したきっかけ

大阪府で生まれ育ち、周囲に農業をしている人が全くいない環境で育ちました。大学進学を機に北海道で生活を始め、そこで現在の妻と出会いました。妻は農家の娘で、「いずれ農家を継ぎたい」という思いがあったため、私も田植えの時期に妻の実家でアルバイトをするなど、次第に農業に関わる機会が増えていきました。大学2年生からは富良野市の農家さんのもとで約1ヶ月半の住み込みアルバイトを経験し、イモの収穫や選別などの作業に携わりました。それまで農業とは無縁でしたが、実際に働いてみると想像以上に楽しく、大学4年生まで同じ農家さんでアルバイトを続けました。この経験が、農業に対するイメージを大きく変えるきっかけになったと感じています。

大学卒業後はすぐに結婚し、社会人経験を積むため農薬・肥料関係の会社に就職しました。最終的に農業を継ぐことは決めていたため、4年間の勤務を経て29歳で就農しました。

2 就農当時のこと

アルバイト時代の楽しい思い出もあり、農業に携わることに抵抗は全くありませんでした。しかし、実際に就農してみると、機械の操縦などアルバイトでは経験しなかった作業も多く、苦労の連続でした。

1年目の時には、小麦を全倒伏させてしまうという大きな失敗も経験しました。アルバイトや会社員時代に得た知識があったため「わかっているつもり」になっていましたが、実際に自分でやってみると想像とは全く違い、思い通りにいかないことを痛感しました。こうした失敗を重ねながら、少しずつ農業に慣れていきました。

3 仕事をするうえで楽しいと感じること

アスパラの直売に大きなやりがいを感じています。義父はアスパラを生産していませんでしたが、大学時代にアスパラのゼミに所属していたこともあり、自分の提案で生産に取り組むことにしました。就農当初は義父の作業を引き継ぐことで精一杯でしたが、アスパラのように自分で新しい作物を育て、それを軌道に乗せることができた時は大きな達成感がありました。

最近ではリピートしてくれるお客さんも増え、普段は直接触れることの少ない消費者の生の声に接することで、農業者としての喜びを強く感じています。

4 青年部活動について

就農当初は4Hクラブに加入していましたが、そこで青年部にも加入している仲間が多く、声をかけてもらったことをきっかけに、就農2年目で青年部に加入しました。地元ではない場所で就農した私にとって、青年部活動を通して気軽に話せる仲間ができたことは大きな支えになりました。他地区の盟友とも出会うことができ、人とのつながりが広がったと感じています。農業に関する知識や情報の共有はもちろん、プライベートでも一緒に遊べる仲間を作ることができ、自分にとってかけがえのない財産になりました。

5 義理の父と母へ

実の息子ではない私を後継者として受け入れてくれた義理の父と母には、本当に感謝しています。就農3年目には経営を引き継ぎ、農業経営の責任を担う立場にもなりました。幼い頃から農業に触れてきたわけではない私に、経営を任せる決断をしてくれたことに深く感謝しています。将来農家になるとは想像もしていませんでしたが、自分で時間を調整しながら働ける農業という仕事は自分にとても合っていたと感じています。

次は子どもたちが私の姿を見て農家に憧れを持てるよう、今後も農業に励んでいきます。

人物 memo

岩見沢市北村砂浜
藤原　瑞貴 さん（34歳）

妻の麻未さん、義父の池田明博さん、義母の美保子さんの家族4人で約42haの農地に水稲や小麦、大豆、ニンニク、アスパラガスを栽培。大学卒業後はすぐに麻未さんと結婚し、社会人経験を積むため農薬・肥料関係の会社に就職。4年間勤務した後、29歳で農業の道に進みました。

現在はアスパラの直売をはじめ、幅広い形で農業経営に力を入れています。